日吉台地下壕保存の会会報

第１４３号

日吉台地下壕保存の会

第 32 回総会報告にかえて

副会長　亀岡敦子

今年は、新型コロナウイルスと呼ばれる未知のウイルス感染症のために、春には、学校は休校となり大勢が集まると感染するからと、コンサートや講演会も中止されました。公共施設も図書館も使用できませんでした。当会の活動も例年とはすっかり変わりました。見学会は 3 月から中止となり、多くの見学希望者にお断りをしています。5 月に予定していた戦跡巡りバスツアーや、8 月の恒例となっている港北図書館での展示と講演会も中止となりました。ガイド養成講座や学習会も中断したままです。何より困ったのは 3 月から 7 月まで運営委員会が開けなかったことでした。

そんな中、6 月 18 日に開催予定であった総会を、どのような形で代替するかが大問題となりました。総会が開けないと、2019 年度の締めくくりができないし、2020 年度の活動を始めることができません。それで、前号 142 号に議案書を掲載し、会員の皆さまに提案をいたしました。ご異議のある場合の連絡先も記載いたしましたが、どなたからもご異議やご質問はありませんでした。従って議案は成立いたしましたので、今号 143 号に第 32 回総会報告として掲載いたしました。ご了承くださるようお願いいたします。

この正体のわからないウイルスにふりまわされて、世界中が不安の中で暮らしています。4 月には、「自分からおこないや態度をつつしむ」はずの「自粛」を政府から「要請（こうしてほしいと願いもとめること）」されると、不思議な暮らし方が始まりました。私たち日本人は、要請を受けいれて、ほとんどの人は家にこもって、スーパーマーケットと銀行に行くくらいの自粛生活をしています。私もそうです。この素直さはなんでしょうか。「欲しがりません　勝つまでは」と軍部を支えた優等生主婦と、現代の私たちの行動のどこが違うのでしょうか。半面、医療関係者やどうしても休めない仕事、家庭ではできない仕事に従事する人たちの、献身に甘えているのも、戦中と同じように思えます。

たまたま乗り物に乗るときにマスクをしていなかったら、さりげないけれど刺すような視線が浴びせられます。直接厳しく叱責する人もいると聞きます。正義は我にあり、とばかりに他人を糾弾するのはかつての自警団とどこが違うのでしょうか。新型コロナウイルスに不幸にも感染した人は、治療で辛い思いをした上に、世間から白眼視されることがあります。かつて、ちょっと自分たちと違っている人を「非国民」と呼び、村八分にしたあの時の民衆と、いまの私たちは少しも変わっていないのではないでしょうか。

8 月になれば少しは収束しているだろうか、9 月になれば展覧会に

【目次】

巻頭言【1-2p】第 32 回総会報告にかえて　副会長 亀岡敦子
報告【2-5p】第 32 回日吉台地下壕保存の会・定期総会
☆2019 年度活動報告　☆2019 年度決算報告　☆2020 年度予算
☆2020 年度運営委員・会長・副会長・会計監査・顧問　☆2020 年度活動方針
港北こぼれ話【5-6p】愛新覚羅溥傑・浩夫妻と日吉の人々　副会長 亀岡敦子
連載【6-14p】
☆地下壕設備アレコレ【28】
・海軍軍令部第 3 部・部長直属Ｋ班の組織と情報活動　運営委員　山田　譲
〔資料 1〕津田つる子さんへの寺田さん聞取り、未発表メモを公開します
〔資料 2〕日吉の東京警備隊・足立長太郎氏のお話
☆みなさんの戦争体験談・資料募集☆
☆日吉第一校舎ノート(19)世界地図のカップ(2)　会長　阿久沢武史
新刊本の紹介【14-15p】戦後 75 年にお薦めの 1 冊　運営委員　遠藤美幸
地下壕見学会の感想【15-16p】
活動の記録（2020 年 6～7 月）、新型コロナウィルスの影響による
日吉台地下壕保存の会の活動の現状【16p】　副会長　喜田美登里

も行けるだろうか、見学会はどうだろうか、と落ち着きませんでしたが、最近の感染者数と政府のちぐはぐの政策を見比べると、簡単には収束しないことが良く理解できました。今まで時間はあるのに気持が落ち着かず本が読めませんでしたが、これからは本を読むことに決めました。ふさわしい本はたくさんあります。

報告　第 32 回日吉台地下壕保存の会・定期総会

☆2019 年度活動報告

◇会員数：個人 340 名　　交換・寄贈団体：97 団体
◇定期総会開催：第 31 回　2019 年 6 月 15 日（土）来往舎シンポジウムスペース
　記念講演「日吉と鹿屋－沖縄戦航空特攻作戦に関わる二つの司令部－」
　　講師：安藤広道氏（慶應義塾大学文学部教授（考古学））
◇運営委員会開催：2019／4～2020／2　8 回
◇会報発行：4 回　138 号（4／25）～141 号（1／23）
◇地下壕見学会：2019／4～2020／2　37 回　2,351 人
◇ガイド学習会／拡大ガイド学習会：2019／7～2020／2　5 回　菊名フラット、来往舎
　見学会ガイドの連絡・学習会。
◇公開講座：2019 年 4 月 6 日（土）（来往舎二階中会議室）
　「戦争体験者のお話」
　話者：岩井忠正さん（人間魚雷「回天」、潜水服の特攻「伏龍」の元特攻隊員）
　　近藤恭造さん（元海軍電信兵）

◇バスツアー：2019 年 4／21（日）「三多摩戦争遺跡と横田基地ウォッチング」27 名参加
◇第 24 回平和のための戦争展inよこはま:かながわ県民センターにて
　講演会：2019 年 5／26（日）
　展示会：2019 年 5／30（木）～6／2（日）展示参加　日吉台地下壕紹介

◇港北図書館パネル展示会・ミニレクチャー・講演会：
　展示会　2019 年 8 月 4 日（日）～8 月 31 日（土）
　ミニレクチャー　8 月 18 日（日）、8 月 25 日（日）、
　講演会　　8 月 12 日（日）『日吉キャンパスにある戦争遺跡』

◇第 23 回戦争遺跡保存全国シンポジウム熊本大会に参加
　2018 年 8 月 24 日（土）～26 日（月）（参加者　350 名）
　主催：第 23 回戦争遺跡保存全国シンポジウム熊本　大会実行委員会、
　　戦争遺跡保存全国ネットワーク
　後援：熊本県、熊本県教育委員会、熊本市教育委員会、熊本日日新聞社、
　　ＲＫＫ熊本放送、ＪＣＮ熊本ケーブルネットワーク株式会社

8/24：全体会
　記念講演「熊本城と軍都熊本」大阪大学名誉教授　猪飼隆明氏
　基調報告　出原恵三氏（戦争遺跡保存全国ネットワーク共同代表）
　地域発表　くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク他

8/25：分科会　第一分科会「保存活動の現状と課題」
　第二分科会「調査の方法と整備技術」
　第三分科会「平和博物館と次世代への継承」

8/26：フィールドワーク

Ａコース：「熊本市内の戦跡をめぐる」熊本空襲慰霊碑、三菱重工熊本航空製作所、歩兵十三聯隊酒保・食堂跡、義烈空挺隊慰霊碑、陸上自衛隊戦史資料室など

Ｂコース：「菊池飛行場と黒石原奉安殿をめぐる」旧陸軍傷病軍人療養所再春荘内の空襲慰霊碑「留魂碑」、旧逓信省熊本航空機乗員養成奉安殿など

◇第27回横浜・川崎平和のための戦争展：2019年11/29（金）～30（土）

テーマ：＜少年・少女と戦争＞～戦争遺跡から見えてくること～

会場：慶應義塾大学日吉キャンパス　来往舎イベントテラス・シンポジウムスペース

パネル展示会：日吉台地下壕保存の会、登戸研究所保存の会、川崎中原の空襲・戦災を記録する会、みやまえ・東部62部隊を語り継ぐ会

若者の発表：日吉台中学校演劇部による朗読劇・慶應義塾高校生による研究報告

講演会：「ある海軍特別年少兵の生き抜く力『「雪風」に乗った少年』を語る」講師『「雪風」に乗った少年』編者　小川万海子さん

各団体からの活動報告

◇11/11（月）横浜市教育委員会文化財課・環境創造局緑地保全課と面会（横浜市役所）

◇ガイド養成講座：

第13期2019／1～5　修了者8名、

第14期2020／1～5　講座未修了

※2019年4月6日（第13期3回目）には、「戦争体験者のお話」というテーマで、元慶應学徒兵・岩井忠正さんと元海軍電信兵・近藤恭造さんより、お話ししていただきました。

2019年度　決算報告

（単位　円）

費　目	2019年度予算	2019年度決算	備　考
【収入の部】			
会費	300,000	282,696	195名
見学会資料代	500,000	519,840	
図書等頒布	100,000	5,900	
寄付金等	0	79,555	
ガイド講座受講料	0	6,000	
繰越金	345,306	345,306	
計	1,245,306	1,239,297	
【支出の部】			
運営費	160,000	125,505	各種会合・打ち合せ等
事務費	120,000	70,686	事務用品費等
印刷費	100,000	113,505	会報・資料等
通信費	300,000	222,636	会報送料等
図書資料費	100,000	3,400	参考書籍・販売書籍
交流・交通費	100,000	92,990	全国集会・各平和展賛助金等
謝礼	80,000	61,700	講演・学習・調査等
冊子作成費	200,000	0	
予備費	85,306	0	
小計		690,422	
差引残高		548,875	次年度繰越金
計	1,245,306	1,239,297	

以上の通り報告します。

2020年5月29日

日吉台地下壕保存の会

会　計　亀岡　敦子　印

この報告により収支を監査したところ、適正に処理されていることを認めます。

会計監査　熊谷　紀子　印

会計監査　山口　園子　印

☆2020 年度　予算　（単位　円）

費　目	2020 年度予算	備　考
【収入の部】 会費	300,000	
見学会資料代	500,000	
図書等頒布	100,000	
寄付金等	0	
繰越金	548,875	
合計	1,448,875	
【支出の部】 運営費	160,000	各種会合・打ち合わせ等
事務費	120,000	事務用品費等
印刷費	100,000	会報・資料等
通信費	300,000	会報送料等
図書資料費	100,000	参考書籍・販売書籍
交流・交通費	100,000	全国集会・各平和展賛助金等
謝礼	80,000	講演・学習・調査等
冊子作成費	200,000	
予備費	288,875	
合計	1,448,875	

収入の部の会費は前年度実績をもとに計上しました。

2020 年 6 月 12 日

日吉台地下壕保存の会
運営委員会

☆2020 年度日吉台地下壕保存の会
運営委員・会長・副会長・会計監査・顧問

会　長　阿久沢　武史
副会長　亀岡　敦子　喜田　美登里　羽田　功
運営委員　石橋　星志　上野　美代子　遠藤　美幸
岡上　そう　岡本　秀樹　岡本　雅之
小山　信雄　櫻井　準也　佐藤　宗達
谷藤　基夫　中沢　正子　福岡　誠
宮本　順子　茂呂　秀宏　山田　譲
山田　淑子　渡辺　清
会計監査　熊谷　紀子　山口　園子
顧　問　鮫島　重俊

☆2020 年度　活動方針

新型コロナウイルスの世界的な感染拡大により、今年度は会の活動が大きく制限されることが予想されます。地下壕見学会の実施については、慶應義塾と調整しながら、会としても慎重に検討することが求められます。地域の小中学校などの学校単位の見学会も、そのほとんどが自粛されるでしょう。会が主催する講演会や学習会、聞き取り調査、パネル展示会等も、中止もしくは自粛という選択になると思います。このような中で、今年度の活動方針を立てることはきわめて困難ではありますが、これまでの会の活動の歴史を踏まえ、以下のとおり昨年度と同じ方針を提案いたします。ただし、実施に関しては安全を第一とし、ひとつひとつ慎重に判断してまいります。

昨年度の活動の成果として『フィールドワーク　日吉・帝国海軍大地下壕』（平和文化）の第４版第１刷の発行（2019 年９月２日）があげられます。見学会用の冊子『戦争遺跡を歩く日吉』は、一昨年に第９版を改定発行し、ともに版を重ねてきました。今年度は、これまでの聞き取り記録を整理した「日吉台地下壕保存の会資料集２」の完成をめざし、準備を進めていきます。さまざまな制約の中でも、会員の皆様と勉強を重ね、地下壕の保存に向けた活動を継続していきます。

以上を踏まえ、2020 年度の活動として、以下の方針を提案します。

活動方針

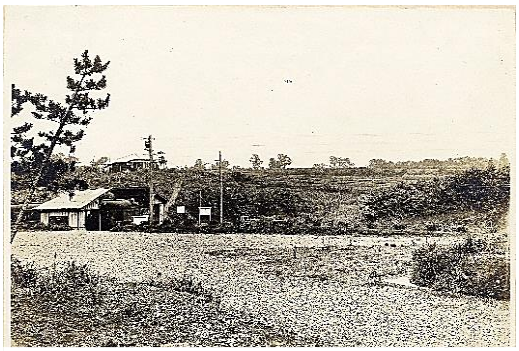
〇文化財指定早期実現を文化庁・神奈川県・横浜市に働きかけ、地下壕を保存する。
〇慶應義塾・横浜市・神奈川県・国への働きかけを、港北区民をはじめとする地域住民と協力して行う。
〇小・中・高校生及び広く一般市民などに対して平易でわかりやすい見学会を実施する。
〇戦争遺跡保存全国ネットワークの会員団体として、全国的な保存活動に参加する。
〇日吉台地下壕見学会の内容をより充実させるために、ガイド養成講座・講演会・学習会を開催し、運営する。
〇川崎・横浜平和のための戦争展を開催する。
〇神奈川県内の他団体と連携し、日吉台地下壕についての展示や講演を行う。
〇日吉台地下壕の調査・研究を深める。
〇運営委員会の活動をより一層充実させる。

港北今昔こぼれ話

愛新覚羅溥傑・浩夫妻と日吉の人々（１）

副会長　亀岡敦子

1927 年、緩やかな多摩丘陵東南端の農村地帯であった神奈川県橘樹郡日吉村に、渋谷と横浜を結ぶ東横線が開通しました。東京横浜電鉄は日吉駅の東側約七万坪を慶應義塾に寄付し、西側に田園調布に倣って扇を広げたような住宅地を整備しました。理想の学園都市と郊外型住宅を結び付けようとしたようです。1929 年から分譲を開始しましたが、初期の購入者の中に、嵯峨侯爵家（明治時代までは正親町三条家を名乗る）がありました。嵯峨家は杉並に広大な屋敷を構えておりましたが、「武相間の風光明媚な日吉」に広々とした別邸を建設したということです。



1930 日吉駅周辺、福澤研究センター所蔵

その嵯峨実勝・尚子夫妻の長女として生まれたのが、のちに満州国皇帝・愛新覚羅溥儀の弟溥傑（1907－1994）と結婚した浩（1914－1987）でした。愛新覚羅溥儀については清王朝最後の皇帝として、映画「ラストエンペラー」に詳しく描かれています。紫禁城の広大な庭を埋め尽くした役人や兵が幼い溥儀にひれ伏すシーンは印象的

でした。1932 年、中国大陸進出をもくろんでいた日本政府は中国東北部に「満州国」を建国し、清王朝の正統を継ぐ溥儀を最初は「執政」に、34 年には「皇帝」にまつりあげました。実権は関東軍にあり、その権力を拡大するために、日本に留学していた溥傑（28 年から学習院、33～35 年は陸軍士官学校）を、日本人と結婚させようと画策しました。白羽の矢が立ったのが、華族の中でも家格の高い嵯峨浩でした。母尚子の実家浜口家は、大実業家で浩は小学校入学時から女子学習院女学校を卒業するまで、上大崎にある英国風 3 階建ての浜口家で暮らし、豊かで文化的な青春時代を送りました。（この建物は現在、タイ王国大使公邸として使用されています）

37 年 4 月神前結婚式を挙げ、披露宴は軍人会館（現九段会館）で、500 人の参列のもと開かれたそうですが、全て関東軍の指揮下で行われたそうです。この結婚は日本中がわき返り、沿道では人々が手を振り、新聞紙面や女性雑誌を二人の写真が飾っています。新生活は千葉市稲毛海岸で始まりました。政略結婚ではあるけれど、趣味や考え方が似ていた二人は互いに惹かれあい愛しあって、幸せな結婚生活が始まりました。独身時代に、中国人の溥傑が横山大観に日本画を、日本人の浩が岡田三郎助に洋画を習っていたのも、ほのぼのとしたエピソードです。結婚から 3 か月後には盧溝橋事件がおこり、日中戦争がはじまり、溥傑と浩は、苦しい微妙な立場に身を置くことになります。浩はこの年の 10 月、満州にわたる前に皇太后に別れを告げます。皇太后からは日満の懸け橋になるようにと、高貴な「白雲花」の木の種を 3 粒手渡され、浜口家に植えられたそのうちの 2 粒は芽を出しました。そのうちの一本は日吉の嵯峨家に分けられて、13 年目に白い房の様な花を咲かせたということです。今も嵯峨家で初夏に花開いているのか、いつか確かめたいものです。

寒さ厳しい満州での、それ以上に厳しい関東軍の管理のもと、お嬢様育ちだった浩の慣れぬ土地での慣れぬ習慣での暮らしが始まりました。38 年には長女慧生が、40 年には次女嫮生が誕生し、家族そろって満州で暮らしました。利発で人見知りをしない慧生は、家庭的に恵まれない孤独な溥儀の心も溶かし、大変可愛がられたということです。

43 年には溥傑が陸軍大学留学のため、再び家族で日本に戻り麻布狸穴に居を構えましたが、慧生は学習院幼稚園に通うため、嵯峨家の祖父母とともに日吉で暮らしていました。すでに世界中が戦火に巻き込まれ、暮らしは不自由になり、空襲にもおびえなければなりませんでしたが、43 年秋から 45 年 2 月までが家族四人で暮らした最後となりました。（次号へ）

参考文献　愛新覚羅溥傑『溥傑自伝』河出書房新社
愛新覚羅浩『流転の王妃の昭和史』新潮文庫

嵯峨家を知る日吉在住の人たちから貴重な情報をいただきました。

連載

地下壕設備アレコレ【28】――ちょっと寄り道――

海軍軍令部第 3 部・部長直属Ｋ班の組織と情報活動

運営委員　山田譲

今回は設備関係の話から、ちょっと横道にそれて「Ｋ班」という海外短波ラジオ放送傍受専門の部署が日吉にあったお話です。寺田貞治さんの残してくださった資料に、前回紹介した「Ｋ班」についての平野保さんの資料がありました。そしてそれ以外にも今回〔資料 1〕〔資料 2〕として記事（別掲）にした、津田つる子さんと足立長太郎さんへの聞取り資料も出てきました。これらの「Ｋ班」についての資料からわかったことを、今回はまとめてみようと思います。

(1) 軍令部第 3 部の組織

軍令部第 3 部は言うまでもなく、海軍の最高司令部である軍令部（陸軍の参謀本部に相当）の情報担当部署です。当然、霞が関の海軍省の中に置かれていましたが、海軍も陸軍同様に情報軽視なので少ない部員ですまされていました。しかし、負けが込んできてさすがに体制・人員を拡充しなければならなくなり、手狭な海軍省から 1944 年 3 月に日吉の慶應大学第一校舎に移転してきました。この日吉の移転先は第 7 分室とよばれ、1944 年 12 月にはチャペルの建物も使うようになり、1945 年 5 月に海軍省が空襲で焼けた後は、人事局や航空本部、

東京通信隊とともに地下壕に入りました。ただ全員が地下に入ったわけではなく、敗戦までＫ班はチャペルを使っており、第 3 部は第一校舎も使い続けたようです。Ｋ班にいた鶴見俊輔は「広い教室」で仕事をしていたと言っています。

第 3 部は第 5 課から第 8 課まであり、それぞれの担当は 5 課が米国、南米。6 課が中国、満州。7 課がソ連、欧州大陸。8 課が英連邦、東南アジア他です。その中心任務は当然、太平洋の米海軍の兵力と動向を探ることです。

敗戦時の第 5 課・課長は竹内馨少将、甲部員・実松譲大佐、乙部員欠員、丙部員・今井信彦少佐、丁部員・瀧田孫人少佐です。この中でもアメリカ大使館武官以来、情報畑一筋だった実松大佐が米国情報分析の中心人物だったようです。その他方で第 3 部部長・中瀬泝少将直属として、甲部員・塚田収大佐、乙部員・矢島源太郎少佐、丙部員欠員、丁部員（兼務）・小澤英夫中佐、戊部員（兼務）・瀧田孫人少佐が配置されていました。(『戦史叢書』付録の 1945 年 8 月 15 日「事務分担一覧表」による。)

この「部員」というのはよくわからない言葉なのですが、航空本部の体験者の回想記でも「部員」とか「部員室」という言葉が出てきます。実松譲の『日米情報戦記』には「資料の価値判断は主務部員がおこなうのを原則とした。しかし、予備士官でも、だいたい二年の年季をいれると……」という記述があります。陸上勤務士官の中でも海軍兵学校卒の職業軍人（佐官クラス）で、各課・各部の担当業務責任者ということのようです。単なる第 3 部所属員という意味での部員ではありません。この部員の下に学徒出陣の予備士官たち（尉官クラス）が部下として配置され、その下に理事生、下士官・水兵、給仕などがいたわけです。このあたりは人事局や航空本部と共通です。

⑵部長直属のＫ班

『日米情報戦記』には「軍令部第三部の陣容（終戦時)」として部長直属 95 名、第 5 課 113 名、6 課 14 名、7 課 41 名、8 課 31 名、合計 294 名とあります。この「部長直属」のなかに大学出身の二年現役・予備士官 14 名がいて、士官以外の嘱託 50 名、女子嘱託・理事生が 25 名とあります。これに（注）として「直属の二年現役、予備士官、嘱託および女子勤務員の大部分は、敵側のラジオ傍受作業――当時「Ｋ班」と呼んだ――に従事した。」と書かれています。また第 7 課 3 人、第 8 課 1 人の特務士官・下士官兵に、(注）として「ロシア語とドイツ語に堪能な下士官兵を、情報作業に利用した。」と書かれています。

これが津田つる子さん、平野保さん、足立長太郎さんの言う「Ｋ班」です。また足立さんが言っている「ロシア語の人が 3 人」、「日ソ学院を出た土方敬太さん」は、7 課の下士官だったということになります。平野さんからいただいた「軍令部第三部直属終戦時名簿」には、部長・中瀬少将、甲部員・塚田大佐、乙部員・矢島少佐の後には大尉 1 人、中尉 2 人、少尉 1 人、兵曹長 1 人、水兵 4 人（平野さんは最下級の一等水兵）が続き、ここまでが軍人です。そのあとは軍属になりますが事務員 11 人、通訳 2 人、給仕 1 人、合計 26 人の名前と住所が書かれています。これでみると、この名簿は矢島・乙部員の部下だけの名簿で、「直属」全員（95 人）の名簿ではなさそうです。この中の「通訳」の男性 2 人は「ハワイ二世Ｋ班」と書かれ、また事務員の女性 1 人も「ハワイ二世Ｋ班」と書かれているわけです。この名簿自体は上等兵の「川口さんより頂く」（ママ）と記されていて、名前の誤記もあり公的な名簿ではなさそうです。

他方、津田つる子さんの聞取りメモに出てくる沢田美喜さん、鶴見俊輔さんは、部長直属の嘱託（軍属）だったということになります。津田さんのお話と平野さんの名簿とうまくつながるところがなくて、どういうことなのかよくわからないのですが、津田さんが部長直属のＫ班員だったことは、お話の内容からしてまちがいないと思います。ただ津田さんのお話にでてくる上司の名前は、1944 年 8 月 2 日の第 3 部の「事務分担一覧表」(『戦史叢書』付録資料）の名前と一致します。ですからお話しされている時期が、平野さんとはちがうのだとおもいます。それはともかく、津田さんによれば「予備学生が多かった。若い二世が多かった。」「タイピスト 8 人、翻訳 10 人」「二世の女性 3 人」。とのことです。また下士官の三井兵

曹と兵士・片山氏がいたとのことで、平野さんの手紙からすると何らかの雑用係だったように思われます。

⑶Ｋ班の業務「敵ラジオ放送の傍受」と日系二世

先に書いたように、部長直属Ｋ班の仕事は「敵側のラジオ放送の傍受」です。このラジオ受信機とそのためのアンテナがどこにあったのかは、よくわかりません。これについては前回書きましたので、それをご覧ください。

どちらにしても、最初は米英のラジオ放送を受信します。（第 7 課だとソ連の放送傍受です。）これを書きとって英文タイプに打ちます。これを翻訳し、さらに邦文タイプに打ちます。これを第 5 課に持っていって分析し判定します。そしてこれを整理し報告文書にまとめるわけです。

津田つる子さんによれば「アメリカの短波放送を 2 世の人たちが傍受し、その内容を語学に堪能な方たち（ハーバード大学から帰国された鶴見俊輔さんなど）が翻訳し、津田さん達が文書に仕上げていったそうです。最初は第一校舎の 2 階で途中からチャペルへ移って、仕事をしておられましたが、仕事が忙しく、『とにかく時間に追われて仕事をしていたので、内容はほとんど覚えていません。原爆のことも含まれていたはずなのですが記憶してないんですよ。』というお話でした。」（会報 60 号）また「津田さんは、空襲の警報が出ると、軍令部の地下壕（第一校舎とグランドの間）へ何も持たずに待避した。」「8 月 15 日の玉音放送は「まむし谷に集合して、ラジオ放送を聞かされました。そしてドイツの敗戦の時情報関係の女の人まで処刑されたという話が伝わってきましてね。私たち理事生には、青酸カリを渡されるということはなかったのですけれども、もう翌日からみんなパーッと散ってしまって。」「その後、実際に軍令部第 3 部から戦犯に問われる人が出て、ハルピン大学を出てソ連関係の情報を扱っていた人と、中佐が一人絞首刑になったと聞きました。」（会報 61 号）

実松譲氏は寺田さんとも懇意で聞取りや手記・資料など協力いただいている方ですが、『日米情報戦記』にはＫ班についても書いています。「情報作業の要領」という節の「情報資料」という項で「われわれが入手できた情報資料の種類と内容」として、「米側ラジオ放送」について書いています。「アメリカは、国内の生産状況や作戦などについて、かなり有用な多くの情報を提供した。われわれは軍令部情報部直属の「Ｋ班」などによって、この放送を傍受して利用した。この場合、相手の宣伝を見分ける必要があったのは言うまでもない。」というわけです。

ついでに言うと、「捕虜の提供した資料」も有力な情報源のひとつであったと書かれています。しかし捕虜の尋問で虐待行為があって、実際に「二人の米軍将校の死」が発生し、このために横浜裁判で死刑をふくむ戦犯判決が出されたようです。実松氏も重労働の有罪判決を受けました。

話を戻します。ここで言われている「アメリカの短波放送」というのは、具体的にどの放送でしょうか。津田さんへの聞取りメモには「ＢＢＣ」という文字が書かれています。これはイギリスの公共放送ですね。また実松譲が書いた「大船捕虜収容所始末記」（別冊週刊読売 1974 年 9 月「実録太平洋戦争史　慟哭編」）には、ＶＯＡ（ボイスオブアメリカ）の放送内容を捕虜の尋問に利用した話がでてきます。また大和田海軍通信所では、通信士官だった野原一夫氏によれば、サンフランシスコ放送やニューデリー放送を傍受していたそうです（『回想学徒出陣』）。ホノルル放送は日本に一番近い放送局ですから当然聞いています。なお「ホノルル放送」という場合には、米軍の太平洋艦隊司令部（ニミッツ司令長官）がハワイにあるのでこの軍事通信局を指す場合もあり、ちょっと要注意です。

もう一つＫ班で大事なことは、アメリカ帰りの日系 2 世がたくさん使われていたことです。これは日吉のＫ班に限らず、通信関係には相当いました。大和田通信所には「20 人余りの二世の女子大生が徴用され、下士官の待遇」で「二世の予備士官がその指揮をとっていた」そうです。吉田満の『戦艦大和ノ最期』には大和の通信科敵信班の、カルフォルニア出身、慶應留学生だった中谷邦夫少尉の悲壮な最後が書かれています。中谷氏については野原一夫氏

も書いています。2 世の人はアメリカ帰りということで、かなり冷淡な扱いを受け、つらい思いをしたようです。日吉の 2 世の人たちも下士官にいじめを受けたと平野さんは書いています。そのために敗戦直後に「仕返し」事件も起きたそうです。
　軍隊の不条理がこういうところにも、はっきり出ているのだとおもいます。

〔資料１〕日吉の軍令部第 3 部Ｋ班（海外短波ラジオ放送傍受）所属の元理事生 津田つる子さんへの寺田さん聞取り、未発表メモを公開します

運営委員　山田　譲

――私たちの会の事務局長だった寺田貞治さんの残された資料の中に、貴重な聞取りメモがありました。メモは 9×13 センチの紙 26 枚で、そのうち 5 枚は紙の裏側にも書かれています。聞き取り年月日・場所は不明ですが、紙の裏側のメモに「川崎平和館」と書かれているので、その開館（1992 年）以降と思われます。津田つる子さん単独の聞き取りなので 2001 年の会報 60～61 号掲載の津田さん他 5 人の「歴史を学ぶ学習会」以前の聞き取りです。メモは走り書きの断片的なものですが、それがなおさら寺田さんの精力的な聞取り活動現場の生々しさを伝えています。このメモに書かれていることは生協ニュースや会報にも掲載されませんでした。しかし沢田美喜さんや鶴見俊輔さんが日吉の海軍にいた話の出所が、この聞取りだったわけです。それがわかって私は「あっ、これだったのか！」と驚きました。貴重な記録です。走り書きのメモですが、いくつか重要なことが語られています。
①、「Ｋ班」という部署名が出てくる。部長直属甲部員の渡名喜大佐、直属乙部員の太田守少佐、8 課丙部員の福岡大佐、司政官の中田氏という幹部のもとで津田さんは仕事をしていた。
②、沢田美喜、鶴見俊輔と一緒に仕事をしていた。２世の人が多数勤務していた。タイピスト 8 人、翻訳 10 人など人数もわかる。海外短波ラジオ放送傍受→英文タイプで書き取り→翻訳→邦文タイプ清書、という仕事の流れがはっきりわかる。
　ここでは紙面の都合で津田さん聞取り以外のところや意味不明なところは割愛し、ひらがなカタカナを漢字に直したり、明らかな誤記も訂正しました。□は読めない文字です。また【　】内は山田による註記です。――

★第 3 部Ｋ班の仕事と人員

・Ｋ班があって、2 世の人がいて、短波で、情報をとっていた。
・中田さんという司令官【司政官】がいたが 2 世の人を管理していた。翻訳していた人が 10 名いた。10 時～3 時に本省に帰っていた。
【「司令官」と書かれているが第 3 部は戦闘部隊ではないので司令官はいない。中田氏は後の方では「施政官」と書かれている。これは調べてみたら「司政官」のことと思われる。日本軍の「司政官」は占領地の軍政を補佐した陸海軍の臨時職員。軍人、官吏、民間人から任命される。】
・撃墜　ＢＢＣ　大使館　ソ連　（三井兵曹）
　ハルピン大学卒（片山　外交官出身）→絞首刑になった。
・大田【太田】少佐（第三部）も絞首刑になった。
【戦史叢書付録のＳ19.8.2.軍令部事務分担一覧表では第 3 部「直属乙部員　少佐太田守」】
・海軍省の情報部に送っていた。
　沢田美喜さん　フランス【駐在】大使の奥さん
【沢田美喜は大磯の戦争孤児施設エリザベスサンダースホームの開設者。岩崎弥太郎の孫。夫はクリスチャン】
・東大法学部卒　沢田少尉さんもいた。予備学生。
　弟もいたが大和といっしょに死んだ。立教大　召集。
【沢田美喜の長男は信一、次男は久雄、三男は晃（インドシナ沖で戦死）、長女は恵美子――沢田久雄は日吉にいたという話がある。亀岡さんが元理事生の方からそのように聞いたそ

うです。】

・予備学生が多かった。Ｋ班は若い２世が多かった。沢田夫人が世話していた。短波をとっていた。

・ＹＭＣＡ【チャペル】にＫ班が入って翻訳。祭壇でやった。終戦の時マムシ谷で迎えた。

・タイプライターを壕にもちこんで仕事をすることになっていたが終戦になった。

・渡名喜大佐がいた。福岡さんが大佐でいた。２世はハワイに帰った。

【Ｓ19.8.2.軍令部事務分担一覧表では「直属甲部員　大佐　渡名喜守定」。Ｓ20.8.15.の一覧表では「第八課丙部員　大佐　福岡武」】

・２世　日本の大【学？】　武宮さんが通訳された。慶應、立教を出た人がいた。

・校舎が白黒に迷彩されていた。【空襲が】激しくなると教会【チャペル】に移された。

・（２世）藤田（牧師）さんがいた。翻訳していた。□さんが留守で日本人を世話をしている。

・１０年以上前に会った。武宮さん横須賀基地で仕事をしていた。

・タイプをたたいていた。息が出来ないほどだった。８：00～５：00
日女大の人が来て、２世の人英文タイプを打っていた。

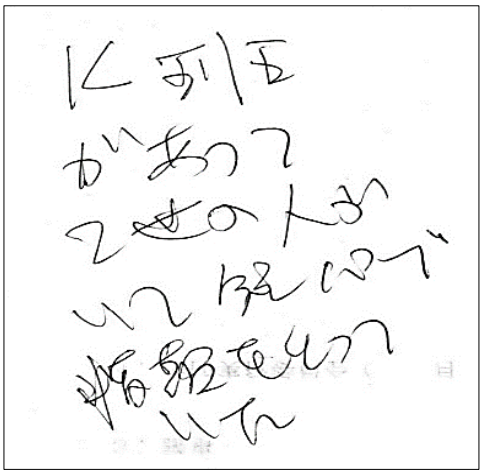
★日吉での生活

・アメリカが日本の飛行機を撃墜したことが多かった。やっている人は原子爆弾のことも知っていた。マムシ谷に下に下りる途中に食堂があって食べた。Ｓ１８年３月に青学□出た。

・大倉山太尾町【津田さんの住所、電話番号割愛】　津田つる子　　幅 1m→イスがあった。

・法政で短大みたいなところで３人でタイプをならったのでＫ班に入った。海軍に採用された。19 年の３月に入って１年半働いて終戦になった。はじめは私服だったがモンペになった。鷺ノ宮から渋谷を通り日吉に通った。１時間ぐらいかかった。

・タイピスト８人、２世の女性３人、翻訳 10 人（第一校舎の時）。沢田　□福→イマコ
兵隊は三井、片山。



津田つる子さんへの聞き取りメモ

・地下水が天井から落ちてきた。トラックも入れた。

・食堂は中庭。トイレが水洗だった。3 月 11 日に山手線で地下鉄から乗ってきた。

・中田さんは施政官【司政官】、民間、日吉に住んでいた。外交官が、軍令部が多かった。福岡大佐。

・津田ゆう介　⇒つる　しゅん介【鶴見俊輔】、翻訳で来られた。軍人では一番上の人。中田は、施政官【司政官】で、そう言った。法政大英文、二世。

・女性は邦文タイプを打った。

〔資料２〕寺田さんの未発表聞取りメモ
日吉の東京警備隊・足立長太郎氏のお話

運営委員　山田譲　ワード化・補記

――このメモも寺田さんの資料に残されていた貴重な記録です。箇条書きのメモですがＢ５版のレポート用紙 10 枚に書かれ、「1993.8.19」と記されています。会報 24 号 1993.9.22.には「（8 月）19 日　元海軍東京警備隊の兵士・足立長太郎氏より聞取り調査、寺田　小園　岡上　足立」とあります。話のなかに「ケイハン」という言葉がでてきて、これは明らかに軍令部第３部Ｋ班のことです。これにはびっくりしました。しかしこの聞取りも生協ニュースや会報に掲載されていません。ただ朝鮮人関係の話だけは『朝鮮人強制連行調査の記録　関東編１』（柏書房 p76～77）に寺田さんが寄稿しています。

以下はこのメモの再録ですが意味不明のところを一部割愛し、ひらがなカタカナを漢字に直すなど補筆しました。【　】内は山田による註記です。――

★34 才で海軍に徴兵、東京警備隊に配属

・明治 44 年生れ。海軍第 2 補充兵、19 年 8 月 10 日横須賀海兵団（34 才）入団。

【「第 2 補充兵」は、第二補充兵役の兵隊。20 才の徴兵検査で「乙種第二合格」（身体虚弱）となり現役入隊しなかった人。したがって足立氏は 34 才の新兵であり二等水兵でした。】

・東京警備隊に 1 週間後に配属された。300 人配属。十返さんもいた。藤まさはるさんもいた。文学者。

・海軍省消防隊が仕事であった。官庁街（霞が関）にあった。5 月の空襲で海軍省が焼けて移った。日吉に来た。3 月 10 日の大空襲があった時は日比谷公園の中にいた。野外音楽堂の近くにバラックを建てていた。【ここが海軍東京警備隊の本部だったようです。】

・19 年 11 月 25 日（最初）の空襲にあった。面会日であった。3 月 10 日の空襲の時、帰ってきた人はご飯を食べなかった。取り片付けに行った。（10 万人死んだ。）

・足立さんは主計兵であった。給仕みたいなもの。中佐の人と兵曹長が何人かいた。軍極秘、部内極秘などをとじる仕事。戦績簿や海軍公報でいろいろ知った。帰りたいから悪いことする人もいて。読めることができた。

・陸軍と海軍と抗争があった―材料など―と言われるが。（末端まで浸透していた）

・横須賀での食事は普通であった。日比谷に行ってからは家にいたときよりもよかった。お腹が減っていた。主計科にいるといつも見ているので食べたくなくなってきた。満腹感があった。兵科の人は足りなかった。夜食（雑炊）をもらうのに時計を渡したりしている人もいた。軍の退廃があった。偉いのは贅沢していた。

・東條、岸信介、崔部【？】。ワイロをとる。物資をとっていた。満州国の時代の軍の腐敗はかなりであった。◦海軍のえらい人が来た時、木の箱に入っていた大正年代の乾パンが出てきた。物もよかった。病院に出すものをピンハネしていた。軍の腐敗は相当なもの。軍の物を持っていった。それがわかって南方にとばされた人もいた。中佐の人は酒保に出す前にピンハネしていた。日比谷公園の木を切って炭焼きをして、その炭を家に持っていった。上の方は笑って見て見ぬふりをしていた。

★日吉に来たのは 6 月初め

・9 日の時は焼夷弾が落ちて消した。日吉には 6 月初めに来た。日吉の食事は普通であった。量的に満足。肉もたまに出た。日吉に来る前のこと、夜は外出できて第一ホテルに泊まった。

・生まれは横浜。東京配電（東京電力）に勤めていた。日吉には急に行くことになった。近所に野菜を買い出しに行った。田を刈ったこともあった。ひどく悪くはなかった。仕事は主計で、1 階級上がり上等兵で終戦の時は兵曹長【兵長の誤り】になった。日吉では事務みたいなこと。疎開家屋の材木（＝廃材）を市役所に買いに行った。日吉に来た時は（6 月ごろ）記念館あたりに烹炊所があった。

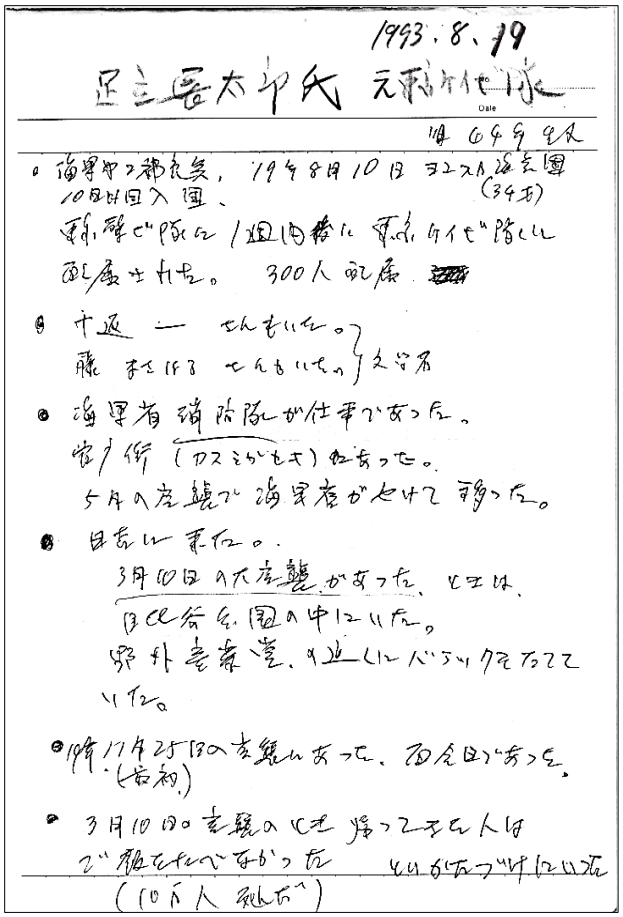
・現在の大学の所に捕虜がいたという。（馬小屋みたいなものが 4 つほど建っていて、ここに入っていた。）連合軍の捕虜であったと思われる。工学部が焼ける前にいたという。焼けた後、小屋を建ててしばらく入っていたらしい。行った時は空家で（6 月 3 日）いなかったが、前からいた人に聞いた。

・警備隊と他の部隊とは関係がなかった。地下壕には入らなかった。工学部の方の壕を朝鮮人が掘っていた。赤紙を出しても 6 月ごろになると届かないということが、ある会議の記録に載っていたのを見た（憲兵隊と警備隊との会合）。ガリ版刷りの書類「ソビエトに対しては慎重であれ」と書いてあった。

・朝鮮人は軍の中でドブ回りを作っていた（作業場の問題もあったので）。8/15 の夜、騒いでいたのは覚えている。聞こえた。働かされていたことは知っていた。

★敗戦前後の日吉海軍の動揺

・階級【章】をはずして 15 日に集まった。職業軍人がどうなるか、わからなかったので。ポツダム宣言についての意見を聞きたいということで集まった。たいした意見は出なかった。本館の教室に集まった。そこで玉音放送を聞いた。部隊ごとに集まった。15 日の夜、ポツダ


1993.8.19
足立長太郎氏　元海軍水兵
Date
住 [illegible]
・海軍の補充兵，19年8月10日 ヨコスカ海兵団 (34才)
10月末回入団、
横須賀で隊に1週間後に東京ケイビ隊に
配属された。300人配属
・千葉 — 5人もいた。
藤 [illegible] 5人もいた。 } 文谷署
・海軍省 警備隊が仕事があった。
常駐 (カスミがせき) があった。
5月の空襲で海軍省がやけて移った。
・日吉に来た。
3月10日の大空襲があった、その時、
日比谷公園の中にいた。
郵便局、[illegible]、[illegible]
いた。
・昭19年25日の空襲があった、百人位があった。
(最初)
・3月10日の空襲の時 帰ってきた人は
ご飯をたべなかった それがなつかしかった
(10人 親しい)

ム宣言について議論をした。
・下士官が偉い人を追い回した。便所に逃げ込んだという。いばっていた人がやられていた。
・集まりから帰ってくるときに、横浜海兵団【横須賀海兵団の誤り】から朝鮮人の兵がいた。
・6月中に日吉にビラがまかれた。「沖縄の住民は民主主義的に平和に暮らしている。」降伏を呼びかけたビラがまかれた。和戦交渉は7月に入って動きはあった。
・ケイハン【K班】（情報部）がアメリカなどの短波を聞いていた（2世の人）。ロシヤ語の人が3人いた（土方敬太、演劇、フランスの新劇、日ソ学院を出た人）。保福寺に泊まったことがあった。土方さんに話を聞きにいった。(陸橋を渡った所にも下宿をしていた。)
・ケイハン【K班】でポツダム宣言のことを聞いていた。国体のことでもめていた。土方敬太【土方氏から聞いたということ】、ソビエトの参戦で決定的となった（敗戦）。海軍省の中にスパイがいるという噂が流れていた。ソ連参戦以後から揺れていた。
・海軍省は、兵隊は飯炊きの兵がいる位で、ほとんど将校である。

★朝鮮人部隊が一時、日吉に

・400人で朝鮮人の兵が横須賀にいた。蔑視があるので半分、日吉に連れてきた。8月の初め頃、別の部隊にいた（独立した部隊）。海兵団の所にいるとトラブルの原因になるので。飯を炊くと手伝いに来て飯を持っていった。畑で働いていたら、そのままトラックに乗せられ、連れて来た。20人位、日本語ができる。家族もいる。北鮮にいた。朝鮮人の人と一緒に8月15日に集まったが、集合ラッパを朝鮮人が吹いていた。8/15の翌日に引き払った。大阪に集結して舞鶴から帰るということを聞いた。帰ったと思ったら、舞鶴に魚雷に触れて帰れたかどうか。15日、朝鮮人は昼から仕事を止めた。反抗する意識の強さはわからない。横須賀の軍需品は持っていってよいということになった。
・退職金をもらって帰った。給料16円。1月分もらった。乗車券をもらった。8月末に除隊した。現在82才。
・相模湾に米国の軍艦がいっぱい見えた。海軍と神奈川県渉外部で、米軍用の慰安所を厚木に作った。勧銀から当時100万を出した。新聞で事務員募集（慰安婦）をした。8月25日すぎから始まった。
・8/28まで日吉にいた。南方の日本兵は、仕事をやらされていた。海軍文庫が大倉山記念館にあった。書類を何日も焼いていた。

《足立長太郎氏の聞取りメモで新たにわかったこと》

①、足立さんの軍歴は、1944年8月10日海軍横須賀鎮守府に34才で第二補充兵役で召集、横須賀＝武山海兵団入団。1週間後に海軍東京警備隊の主計兵に配属。海軍省隣の日比谷公園内の警備隊に勤務。1945年6月3日に日吉に来ました。終戦時は上等水兵で終戦後の昇級で水兵長。8月28日に除隊・復員し帰宅しました。

②、日吉に連合軍捕虜がいたという話は初耳です。ただ日吉にいた軍令部第3部の実松譲大佐は海軍大船捕虜収容所で米軍捕虜の尋問をしていて、そのことで戦犯となり巣鴨プリズン

で服役していました。第３部でＢ級戦犯として処刑された人もいました。ですから尋問のために第３部が捕虜を日吉につれてきた可能性はあります。何か裏付けがあればいいのですが、足立さんの話も伝聞情報なので、今のところ未確定情報です。

③、軍令部第３部Ｋ班のことが出てくるとは意外でした。寺田さんのメモでは「ケイハン」となっていますが、前後に書かれていることからすると、明らかにＫ班です。この話はＫ班所属の土方敬太氏他から終戦直後に聞いた話ということですね。

④、大倉山の海軍地下文書庫のことも知っていたようで、これも驚きです。さすが年配の兵隊は違いますね。ただ実際の所在地は大倉山記念館ではなく、東横線の東側の師岡町です。

―――☆みなさんの戦争体験談・資料募集☆―――

戦後 75 年の今日、アジア太平洋戦争の記憶がどんどん遠のきつつあります。戦争体験者も高齢化し、ご存命の方も少なくなっています。これを少しでも語り伝えていくために、会員のみなさんの戦争体験、父母や親族・知り合いから聞いた戦争の体験談や資料などありましたら、お寄せください。短くてもかまいません。会報の記事にするなどして語り伝えていきたいとおもいます。よろしくお願いいたします。

なお体験談等をお寄せいただく際には、氏名、年齢（生年月日）、当時の役職・所属校、年令、現在の連絡先など付記いただけると幸いです。

連載

日吉第一校舎ノート（19）西暦と皇紀（その１）

会長　阿久沢　武史

世界地図のカップの上にあるアール・デコのレリーフには、中央のペンのマークの左右に西暦と皇紀が並べられている（〈写真①〉）。この西暦と皇紀の併記は、校舎北側の俗に「パルテノン」と呼ばれるコロネード（列柱廊）にも見られる。「１９３４」はもちろん第一校舎の竣工年の昭和９年であり、皇紀で言えば「２５９４」であった。

〈写真①〉アール・デコのレリーフ

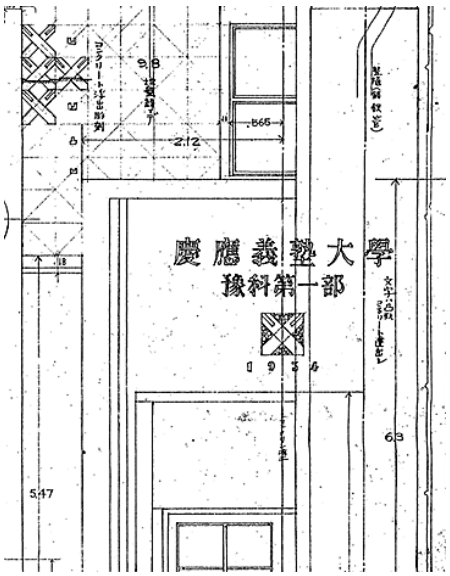
西暦と皇紀、それにしてもなぜ「皇紀」がことさらに強調されているのか。先述したように、正面玄関の中央にある校名は、現在は「慶應義塾高等学校」であるが（〈写真②〉）、竣工時は「慶應義塾大学」と「豫科」が右から左へ（右横書きで）二列に並び、ペンの下には「二千五百九十四年」と皇紀が漢数字で記されていた（〈写真③〉）。ところが設計図（慶應義塾所蔵「日吉台慶應義塾大学　予科第一部建築設計図」曽禰中條建築事務所）を見ると、「慶應義塾大学」「豫科第一部」と左から右に（左横書きで）二列に書かれ、ペンの下には「１９３４」と西暦が記されている（〈写真④〉）。設計段階で西暦であったものが、竣工時には皇紀に変わった。ここにはいったいどのような事情があったのだろうか。

〈写真②〉現在の正面玄関

設計図に記された日付は昭和 7 年 9 月 27 日であり、竣工は昭和 9 年 3 月であるから、この間に変更が加えられたということになる。それは一般的に考えれば、施主（建築主）である慶應義塾の意向であろう。

昭和 7 年（1932）から昭和 15 年（1940）までのこの時期は、「皇紀」が国をあげて強く意識されていた時代であった。

〈写真③〉予科時代の正面玄関



〈写真④〉「設計図」の正面玄関

昭和 16 年は紀元 2600 年にあたり、この記念すべき節目の年に向けてさまざまな行事が企画立案されていったのである。その最大のイベントは、東京オリンピックであり、万国博覧会であり、紀元 2600 年式典であった。

皇紀の制定は、明治 5 年（1872）にさかのぼる。初代神武天皇の即位が紀元前 660 年に行われたとし、この年を建国元年として法制化した。以後、皇紀は天皇を中心とする近代国家日本の統合のシンボルとして親しまれていくことになる。同時にそれは世界有数の歴史を持つ国としての国民のアイデンティティの拠り所になっていった。紀元 2600 年を祝して昭和 15 年 11 月 10 日に行われた式典で、その意識は最高潮に達する。皇居前広場には天皇・皇后臨席のもと、近衛文磨首相以下約 5 万人が集まり、「万歳」の声が高らかに響き渡った。この日を中心に全国各地で行われた奉祝記念行事には、のべ 5000 万人が参加したという（古川隆久『皇紀・万博・オリンピック』中公新書）。

この「皇紀 2600 年」という年が、具体的な形で国民の間に意識され始めたのは、昭和 5 年（1930）から翌 6 年であった。5 年 12 月に東京市長永田秀次郎が、皇紀 2600 年にあたる 1940 年の第 12 回オリンピック東京招致の意向を公表、翌年 10 月の東京市会で満場一致で可決された。以後、東京市は昭和 10 年（1935）に予定されたＩＯＣ総会での東京開催決定に向けて活発に動き出すことになる。昭和 7 年（1932）のロサンゼルスオリンピックで開かれた総会では大規模な招致運動を展開し、翌 8 年（1933）5 月には東京市にオリンピック委員会が設置され、翌 9 年（1934）3 月の市議会でオリンピック招致費予算を可決した。こうした一連の動きの中で、オリンピック東京招致に向けて重要な役割を果たした思われる人物に平沼亮三がいる。

本稿は『慶應義塾高等学校紀要』第 46 号（2015 年）に発表した拙稿「日吉第一校舎ノート(二)クラシックとモダン」の再録となります。

新刊本の紹介

戦後 75 年にお薦めの１冊

岩井忠正・忠熊『特攻 最後の証言』河出書房新社（2020 年 8 月）

運営委員　遠藤美幸

日吉台地下壕保存の会の会員の皆さんは、岩井忠正さん（100 歳）と弟の忠熊さん（98 歳）をご存じの方も多いのではないかと思います。この数年、各種メディアに取りあげられてとても有名な元特攻兵のご兄弟ですが、実はお二人と当会は長きにわたりご縁があります。

2002 年秋頃、歴史学者の忠熊さん（立命館大学名誉教授・同大元副学長）には「横浜・川崎平和のための戦争展」（日吉キャンパス来往舎にて）でご講演頂きました。最近では、昨年 4 月の公開講座で忠正さんを日吉キャンパスにお招きし、戦時中の体験談をお話し頂きました。その際、懐かしの第一校舎をはじめキャンパス内を散策され、大変喜ばれておられました。1943 年 10 月、岩井忠正さんは慶應義塾大学在籍時に「学徒出陣」で、人間魚雷「回天」や人間機雷「伏龍」の特攻隊員になり、忠熊さんは京都大学在籍時に兄と同じ海兵団に入団し、爆弾を積んだモーターボートで敵船に体当たりする「震洋」の艇隊長になりました。

今年戦後 75 年ですが、100 歳と 98 歳の元特攻兵が兄弟そろって本を出版されるとは、前代未聞の快挙ではないでしょうか？2002 年にお二人は『特攻』（新日本出版社）を出版され

ていますが、今夏に出版された『特攻 最後の証言』では、「新型コロナウィルス」に翻弄されている現代日本の状況にも言及されています。日本人は「お上の言うことに素直に従う特性がある」と指摘しつつ、忠正さんは戦争を体験して「お上の言うことを鵜呑みにする怖さ」も知っているだけに「言うべきことはハッキリと言わねばならない」ときっぱりと述べられ、コロナ禍での「緊急事態」というドサクサに紛れて国民の安全や人権が損なわれる事態になることを懸念されています。いわば「非常時の日本人」の一種の思考停止に警鐘を鳴らされています。75 年前といまが繋がっていることを当事者のお二人から切に発せられ、大変説得力があります。

2019 年 5 月の忠正さんの白寿の祝席
左）忠熊さん　右）忠正さん

忠正さんは、あの戦争は間違っていたのに時代に迎合してしまった自分を今でも猛省し、若者に自分のようにならないでほしいと訴えられています。忠熊さんは歴史学者の立場から、無謀な戦争をなぜしたのかを問い続けられ、若者に歴史を学び、二度と戦争を起こさない未来を築いてほしいと訴えられています。

他にも本書には関東大震災直後の「甘粕事件（1923 年 9 月）」、「満州事変（1931 年 9 月」）、「南京虐殺（1937 年 12 月）」などの重大な証言も記載されています。本書が戦時下の厳しい内容にも関わらず軽やかに読めてしまうのは、仲の良い兄と弟の絶妙な対談によるからでしょう。本当の戦争の中身を知るために、今夏にぜひご家族でお読み頂きたい 1 冊です。

岩井兄弟の２冊目も出版されました。『特攻と日本軍兵士』広岩近広・岩井忠正・忠熊著 毎日新聞出版社刊

地下壕見学会　小学生の感想文

1 月 21 日に日吉南小学校 6 年生 159 名を案内しました。校長先生から生徒さんの感想文をいただきましたのでご紹介します。

○ 日吉台地下壕見学のお礼

この度は、日吉台地下壕見学会に際しまして、貴重な戦争遺跡の細かなご説明をいただき、誠にありがとうございました。子供たちは、日吉台地下壕を見学することで、あの時代、そこで働いていた人たちや暮らしていた人たちの気持ちを感じ、当時の人々の願いについて考えることができました。また、戦争の悲惨さや愚かさについても気づき、今の平和な日本についても改めて考えるきっかけになりました。ご指導いただいたことを今後の子どもたちへの指導に生かしていく所存でございます。今後ともよろしくお願い申し上げます。子供たちの感想の一部を抜粋したものをつけております。

○ 地下壕は、虫がたくさんいたり、道が分かれている所があってこわかったけど、戦争中はそんな事を言っていられないほど大変だったのだなと思った。物資が不足していた時、人間魚雷や桜花を使わないといけなくなってそれを操縦する人は敵といっしょに死んでしまうという話を聞いて、死ぬと分かっているのに敵に立ち向かうなんて自分だったら無理だと思った。色々な話を聞いて戦争をやらない方が良い理由をあらためて知った。

○ 地下壕。地上とはまるで全く違ったようだった。司令長官室や作戦室などいろいろな部屋に行った。その部屋についてくわしく説明してもらった後その時に生きていた人がここ

でくらしている様子を想像してみた。まるで自分がそこにいるように思えこわかった。地下壕が負の遺産のように思えた。でもそういう所に行けて実際に見たり体験できて貴重な時間だと思えた。今まで戦争について実感がなかったが地下壕で実感できてよかった。

○地下壕をけんがくして、戦争の時は地下で時間をすごさなきゃいけないときいて、ぼくは見学しただけの時間もつらかったけど、それを毎日すると思ったら、とてもたえられないと思いました。戦いだけでなく生活も厳しかったのだなと感じた。また、こんな昔にもこんなにも大きな洞くつをつくれる技術があったことにおどろいた。地下ごう見学して、戦争の苦しさなどを改めてしれた。

○　日吉という、あまり歴史に関係の無さそうな場所が、かいぐんの司令部がその場所を使っていたり、そこから太平洋戦争に関する指令も出したり受け取っていたとわかり、日吉は歴史に大きく関わっていたとびっくりしました。

○　当時は私達より二、三才だけとし上の人も働いたり、戦ったりしていたというお話は、とてもおそろしく感じました。過去の日本にあった、ひげきを忘れないために、日吉台地下ごうは、大切に未来に残してほしいと思いました。

ナミアゲハチョウ

活動の記録　　２０２０年６月～７月
６／１３㈯　会報 142 号発送（運営委員の自宅で作業）
７／１８㈯　横浜・川崎平和のための戦争展実行委員会
７／２８㈫　運営委員会（来往舎　小会議室）　（中原市民館）

★新型コロナウィルスの影響による日吉台地下壕保存の会の活動の現状

○すでに中止したもの
・戦跡巡りバスツァー（5 月）
・2020 年度総会と講演会（6 月）　会報 142 号で議案提案と意見募集、143 号で決定報告。

○延期中のもの
・ガイド養成講座　1 月に開始。３・４・５月が中止となったが可能になれば実施予定。
・平和のための戦争展 in よこはま　5 月の開催を中止。10 月にかながわ県民センターでの特別企画開催を予定（展示は中止）。

○中止が決定しているもの
・港北図書館での展示と講演会（8 月）　・公開講座（2020 年中は開催困難）
・横浜・川崎平和のための戦争展（2020 年中は開催困難）
・戦争遺跡保存全国ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ東大和市大会（2021 年 8 月に延期）

○地下壕見学会について
日吉キャンパスでは慶應義塾高校は授業再開していますが、大学は後期もリモート授業を継続の予定。地下壕見学会再開は難しい状況です。3 月～8 月まで定例見学会をお休みしていますが、9 月以降も未定です。多くの方から問い合わせをいただいています。この季節に「戦争遺跡」を紹介する活動ができないのは本当に残念です。地下壕ガイドが現在できるのは「コロナ下？」「コロナ後？」の見学スタイルの模索、地上部案内の工夫でしょうか。

★お問い合わせ・申込は見学会窓口まで　Tel/Fax　045-562-0443　喜田（午前・夜間）

連絡先（会計）亀岡敦子：〒223-0064 横浜市港北区下田町 5-20-15　℡ 045-561-2758
（見学会・その他）喜田美登里：横浜市港北区下田町 2-1-33　℡ 045-562-0443
ホームページ・アドレス：http://hiyoshidai-chikagou.net/

日吉台地下壕保存の会会報　（年会費）一口千円以上
発行　日吉台地下壕保存の会　郵便振込口座番号 00250-2-74921
代表　阿久沢　武史　（加入者名）日吉台地下壕保存の会
日吉台地下壕保存の会運営委員会